

ピエール・ジョセフ・ルドゥーテが描いたバラ

野村 和子(バラ文化研究所副理事長)

ベルギーで生まれ、フランスで活躍した画家ピエール・ジョセフ・ルドゥーテの生きた時代は華やかでもあり、かつ動乱の歴史を刻んだ時でもありました。モーツアルト、ベートーベン、シューベルトなどとほぼ同時代であり、童話作家として著名なアンデルセンはナポレオン軍に従軍したことが引き金で父を亡くしています。

ルドゥーテもマリー・アントワネットに仕え、すでにタンブル城で囚われの身となっていたルイ16世とマリー・アントワネットの許も訪ねています。フランス革命を経て、その後台頭したナポレオン妃ジョゼフィーヌの宮廷画家として活躍することになるのです。

多くの精密画を遺していますが、出版物として知られるのに『ユリ図譜』と『美花選』があります。なんといっても金字塔といえるのが『バラ図譜』でしょう。ジョゼフィーヌの命により、その宮廷マルメゾンに収集された多くのバラを描き、『バラ図譜』として出版されたのは1817年から1824年にかけてで、それはすでにジョゼフィーヌの死後のことでした。

3年連続でこの『園芸文化』誌上にバラをテーマにした報告を載せている関係上、ルドゥーテの業績やその時代背景について述べるのではなくて、あくまでもバラを中心とした見解を展開してみたいと思います。

この『バラ図譜』には169種のバラが描かれています。

ルドゥーテというとオールドローズを描いた画家のように考えられています。

そこで彼が描いたバラをまずは種類別に分類をしてみました。すると、大きく5つに分けることができます。

- 1 古代バラ
- 2 ケンティフォリア系
- 3 チャイナ系
- 4 オールドローズ
- 5 ワイルドローズ

因みに1から4までは大きく分類するとすべてオールドローズの範疇に含まれます。今回ルドゥーテの作品に限ってもう少し絞って分けてみました。それぞれに従ってさらに詳しくみていきましょう。

1 古代バラのグループ

大きい区分ではオールドローズですが、ルドゥーテの作品の中から、ギリシアやローマの時代から栽培、利用されてきたと考えられるガリカ、ダマスケナ、アルバを古代種としてここに入れました。その後、年月を経て変異や自然交配などから選抜されてできた多くの派生の種もここに含めました。

2 ケンティフォリア

16世紀ころに出現したといわれるケンティフォリアとその派生種です。モスローズという系統があり、その多くはケンティフォリアから出たもので、ここに入れました。少しですが、ダマスクローズ由来のモスローズもありますが、モスローズであるということでここにまとめました。

3 チャイナ系

ルドゥーテがロサ・インディカと言っているものすべてがここに入ります。チャイナローズをなぜインディカというか、という疑問もですが、当時は中国のものはほとんどがインドを通過してヨーロッパへ入ったことによります。

4 オールドローズの各系統

チャイナローズがヨーロッパに紹介されてからその四季咲き性が注目され、自然に或いは人工的に交配がされて確立したオールドローズのいくつか

の系統の起源となったもの。ポートルンドローズ、ブルボンローズ、ノワゼットローズ、ブルソールローズなど。

5 ワイルドローズとその派生種

この中にはワイルドローズとはいえないかなり華やかなものも入っています。たとえば、マルチフローラ・プラティフィラなど。しかし、これらを別扱いにすると線引きが困難なため、派生種と名づけてひとつにまとめました。が、数が多いために、チャイナ系を除くアジアに自生するもの、アジアからヨーロッパに分布するもの、ヨーロッパの野生種、アメリカの野生種、同定しかねるものの5つのグループに再分類しました。

これらをルドゥーテが描いた数字でみてみましょう。

1のグループ 42種

(ガリカ 27、ダマスク 11、アルバ 4)

2のグループ 21

(ケンティフォリア 17、モス 5)

3のグループ 18

4のグループ 7

(ポートルンド 1、ブルボン 1、ノワゼット2、ブルソール 3)

5のグループ 81

(チャイナをのぞくアジア 13、アジア～ヨーロッパ 14、ヨーロッパ41、アメリカ 7、同定しかねるもの6)

この数字から注目したいことがいくつかあります。

1のグループは古代より栽培されてきたものであり、新しく派生してきたものも加えると数が多いのは理解できるし、厳選された美しい花が多いのも頷けます。

2のグループについてはケンティフォリアローズはそれまでにない美しさ、華やかさを持っていたため、「画家のバラ」といわれたほど、多くの画家たちがこぞってこの花を美しさを描き出しています。このグループが多く描

かかれているのは、そして「バラ図譜」の第1ページを飾っているのは当然といえるでしょう。

3のグループ、これも18世紀の中ごろから19世紀のはじめにかけてヨーロッパに紹介された中国の四季咲き性のバラたちです。ヨーロッパに入って日が浅いのに、確実に隔月に咲くバラが如何に歓迎されたかは数字から理解できます。

4古代バラ、ケンティフォリア、チャイナを除くいわゆるオールドローズといわれるグループです。この数字の低さに驚かされます。ここから分ること、それはルドゥーテが生きた時代は古代バラからいわゆるオールドローズへの過渡期、別の言い方をすればポートランド、ブルボン、ノワゼットなど現在オールドローズと呼ぶものの基礎がやっと築かれた時期にルドゥーテは活躍し、バラを描いたということが分ります。

5ワイルドローズの数字の多さに驚かれる方もいらっしゃるでしょう。ルドゥーテというと今でいうオールドローズを描いた画家のように思われがちですから。

勿論これらの中には純然たるワイルドローズのみでなく、変異や自然交配で出現したのであろう八重咲きの華やかな種類も混ざっています。同じ種名を並べることで、原種と派生種の違いを比較できる楽しさもまたでてくることと思います。

本来バラの野生種はアジアに多く、ルドゥーテが描いた数字でみるようにヨーロッパに多いわけではありません。が、それはルドゥーテがヨーロッパ人であり、身近に見られる機会が多いものを描いたために数字が高くなったのは当然でしょう。むしろ、日本のバラやアメリカのバラを描いたことに驚きを感じます。

また、プロリフェラと名づけて、ちょっとした変異のバラもひとつの独立種として描いています。花の中心からまた花が上がってくる、ということは時にはあることです。これは当然ですが現在では別の種類としては扱いません。従ってこれら数字がすべてではありませんが、当時のバラを調べるガイドンスとなっていることは紛れもない事実といえます。

ルドゥーテが描いたバラは決して過去のものではなく、多くの種類が今も

脈々と息づいています。それをみると、今の時代にリアルタイムで描いたかのような錯覚にさえ捕らわれます。それがルドゥーテが今なお多くの人々に支持される大きな要因ともなっているのでしょう。

そして改良という過渡期にあったバラを忠実に描いたということで、バラの改良史をひも解く重要な資料ともなっています。

* * * ルドゥーテの絵に現在の写真を並べてみたもの * * *



ロサ・ガリカ・ヴェルシコロール



ロサ・ケンティフォリア



ロサ・インディカ・ヴリガリス



オールドブラッシュ



ロサ・キネンシス・センペルフローレンス



ロサ・インディカ



ロサ・インディカ・フラグランス



ロサ・オドラータ



ロサ・モスカータ



カカヤンバラ



ロサ・ブラクテータ



ロサ・アルピナ・ペンデュリナ



ロサ・ペンデュリナ



ロサ・エグランテリア



ロサ・フォエティダ



ロサ・エグランテリア・プニケア



ロサ・フォエティダ・ビコロー

* * * * *

東京渋谷のBunkamura ザ・ミュージアムで5月17日より6月15日まで、ルドゥーテの全作品を中心としてバラを描いた作家の展覧会を開催しています。従来のように作品の順番に展示するのではなく、この解説のように園芸的に分類し直して展示をしています。